

蛭ヶ谷の田遊び

蛭ヶ谷地区の蛭児神社で、2月9日、鎌倉時代から伝承されている国指定重要無形民俗文化財「蛭ヶ谷の田遊び」が行われました。

神事では、五穀豊穡と子孫繁栄を願い、「ほた引き」「田打ち」など農耕の様子を模した計16演目が、燃えさかるかがり火の前で演じられました。天地と四方の悪霊を追放する結果の作法とされる、本刀振り、もどぎ、長本刀振り、木長刀振り、杵振りと続く呪師芸で始まる神事は、夕刻から深夜にかけて約5時間にわたり奉納されました。

また今年も、地元の小中学生も参加し「ほた引き」と「里田打ち」の演目を奉納青年会のメンバーと一緒に演じ、奉納しました。

番外の「矢納め」から「蓬莱山」までの18演目を持つ「蛭ヶ谷の田遊び」は、東海地方の多彩な田遊びの中でも、この地域だけの特異な演目がいくつもあります。

凍てつく寒さの中、蛭ヶ谷地区の青年15人は、代々受け継がれてきた神事芸能を厳かに演じ切りました。音曲のない静寂の中、黙々と演じる姿に、集まった観衆は魅了されていました。

観衆が帰ったころ、杉の葉で作られた「ほた小僧」と呼ばれる人形が本殿脇の桜の木に結えられ、奉納が終わります。



桜の木に結えられたほた小僧



稲刈りの様子进行する奉納青年会メンバー



ほた引きの演目に参加した小学生の様子



氏子代表 長谷川 信矢さん

平成24年に国指定重要無形民俗文化財に指定され、地域の大切な行事として、地元の氏子メンバーで毎年盛り上げて活動していますが、年々メンバーが減っています。今回は、この田遊びを長く継続させていきたいとの思いから、やり方を変えて地域の子どもたちへの参加をお願いしたところ、10人の小中学生が参加してくれました。

少しずつ関わりを持ってもらう中で、この伝統行事に興味を持って、継承してもらえると嬉しいです。



音曲のない静寂の中、燃えさかるかがり火の前で地元青年がそれぞれの役を演じた。

県指定無形民俗文化財

一幡神社の御神神事

ケ谷地区の一幡神社に伝わる県指定無形民俗文化財「御神神事」が、2月8日から10日までの3日間にわたり行われました。

これは、毎年2月に五穀豊穡を願う行われる古例祭の別名で、二十八名と呼ばれる28軒（現在は21軒）の家が主催者となり執り行われる宮座行事です。

二十八名が2軒1組となり、順にその組みが年番となり「本名」と「相名」の役割が当てられます。

今年の神事では、1年間本名を務めた田形治さん宅で2日間にわたり、神事の従事者たちが御神酒（ごぶろく）や御神体である御神様、御本飯などを準備しました。最終日となる10日には、神饌や神事の道具を担ぎ、魔よけとされる榊の葉をくわえながら一幡神社へと向かいました。

神社では、菅山小学校の児童が「お榊の舞」を披露するとともに、式典が執り行われ、本名によって1年間守られてきた御神様が開かれ、氏子や参拝者らに中身が配られました。

神事後、役目を終えた田形さんから新たに本名となる高塚勝之さんに、御神体の餅が渡されました。

御神体の餅は、小さくさいの目に切られ、榊の葉とともに竹の簀の子に包んで榊の枝につるした御神様が作られ、一幡神社の境内に設けられた「御仮屋」に祭られました。



本名により1年間祀られた御神様



2日目に行った御神体となる餅つきの様子



御神様が祀られる御仮屋



1年間本名を務めた 田形 治さん

家族や周りの協力もあり、1年間本名を務めることができました。御神様を大切に守りながら、無病で過ごせたことに感謝いたします。



本名を引継いだ 高塚 勝之さん

1000年近く続いているお祭りなので、後世にちゃんと伝えていけるように、1年間しっかりと御神様をお祀りしたいと思います。



大切な御神体に息を吹きかけないように榊の葉を口にくわえ、一幡神社に向かう。